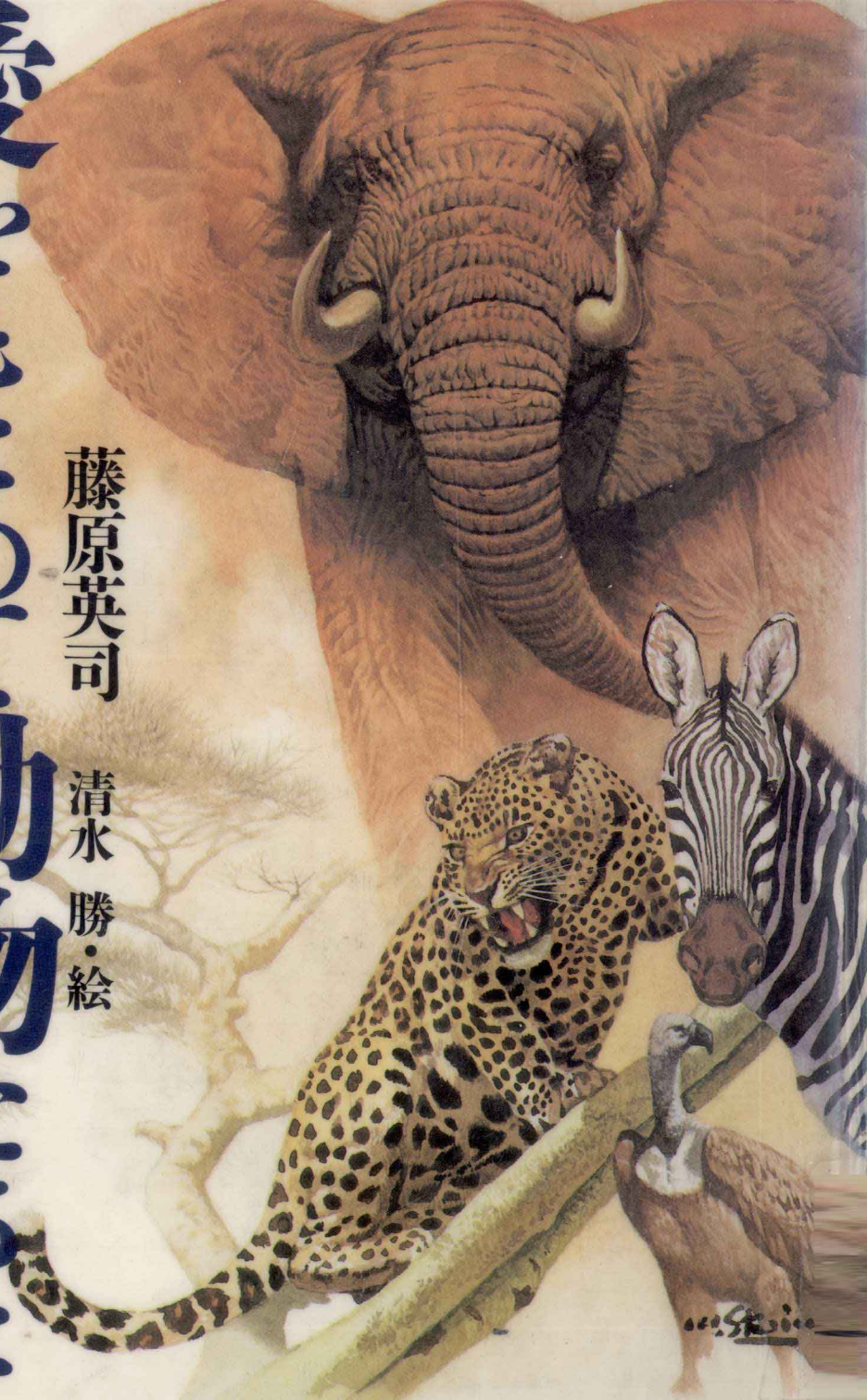


愛をもとめて動物たちと

藤原英司

清水勝・絵



SHUNSUKE



913

藤原英司

愛をもとめて動物たちと

藤原英司文 清水 勝絵

国土社 1984

253p 21×15cm (現代の文学 3)

愛をもとめて動物たちと〈現代の文学・3〉

1984年1月15日初版1刷印刷

1984年1月25日初版1刷発行

著 者 藤 原 英 司

発行者 長 宗 泰 造

発行所 株式会社 国 土 社

〒112 東京都文京区目白台1-17-6

☎03(943)3721 振替 東京6-90631

印刷所 株式会社 厚 徳 社

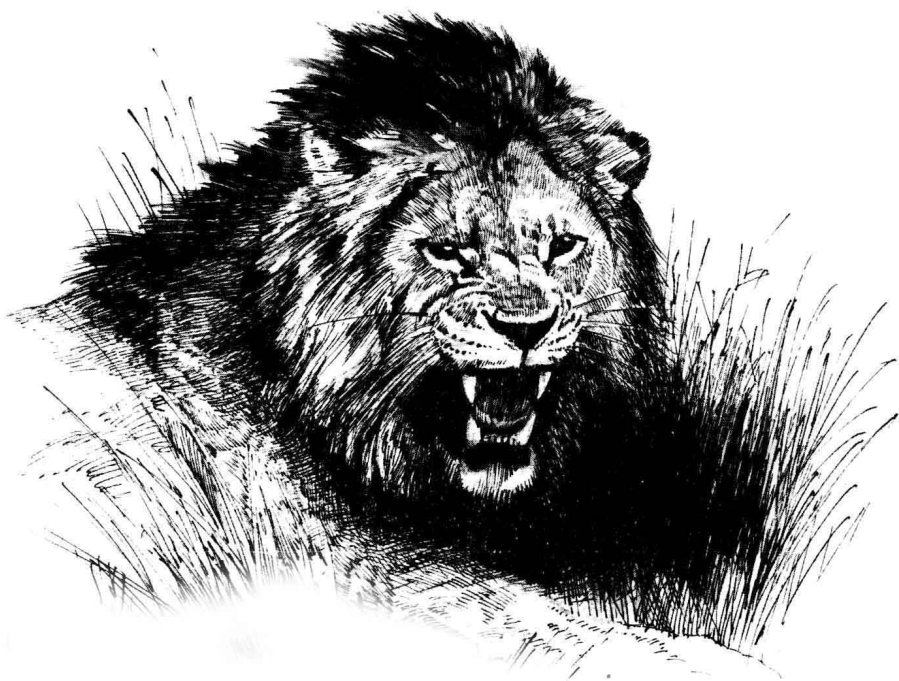
© 藤原英司／清水 勝

ISBN4-337-20503-9 C8391

愛をもとめて 動物たちと

藤原英司

清水 勝・絵



もくじ

★

第Ⅰ部 黒いヘリコプター 5

南十字星の下で 6

黒いヘリコプター 32

男の勇氣 60

★★

第Ⅱ部 インド洋をこえて 87

さらばアフリカ 88

船の旅 113



インド洋上の事件^{けん} 138

獣医^{じゅうい}の仕事 161

★★★

第Ⅲ部 アフリカのいぶき 179

動物たちの歓迎式^{かんけいしき} 180

かさなる事件^{じけん} 197

かけひき 207

アフリカのいぶき 224

★★★★

あとがき 252





著者・藤原英司

慶応義塾大学卒業。日本学術会議自然保護研連委員。
エルザ自然保護の会長。著書に「アメリカの野生動物保護」(中公新書)、「世界の自然を守る」(岩波新書)、「動物の行動から何を学ぶか」(講談社)など。訳書に「野生のエルザ」(文藝春秋)、「自然保護」(講談社)、「野性の巨象」(朝日新聞社)、「野性の賛歌」(思索社)、「雪原のオオカミ」(国土社)などがある。

画家・清水勝

一九一九年、大阪市に生まれる。中之島洋画研究所にて油絵を学び、制作のかたわら在阪出版社の図鑑・挿絵などを描く。その後上京、以後各社の図鑑、動物を主としての挿絵などに従事。一九六三年、小学館絵画賞を受く。主な作品には動物図鑑、シートン動物記。他に著書として「こんにちは動物たち」「動物を描く」がある。

第Ⅰ部

黒いヘリコプター





南十字星の下で

マサイ族の戦士メニエは、ふと足をとめた。子ネコが鳴くような声を聞いたように思ったのだ。

彼はあたりを見まわした。近くに小さな岩場がある。平地からきゆうに岩山が頭をだしたように、そこだけ、いくつもの大岩をつみかさねた低い小山ができていた。

メニエは足もとの土をけとばした。小さな土ぼこりがたち、それが、彼の足もとをまいて流れた。風がまわっているようだ。

風にちった土ぼこりが、彼の体のまわりをひとまわりして、岩山の方角から彼の体のほうへふき流れたとき、また子ネコのような声が聞こえた。

声のするのは、岩山の方角だ。彼は右手の槍をにぎりなおすと、すばやく身がまえながら、あたりを見まわした。

声はかすかだったが、ネコ類の動物の子がその岩山のどこかにいることは、たしかだった。ラ

イオンの子かもしれないが、ひよつとすると、チーターかヒヨウの子かもしれない。そう思うと、メニユエの心がさわるだ。

いずれにしても、その場から逃げだしたほうが安全なことはわかっていた。もし親が帰ってきて近くに人間がいるのを見つければ、まちがいに攻撃してくるだろう。

だが、メニユエは、すぐに逃げだす気にはなれなかった。ライオンではしょうがないが、チーターかヒヨウなら、高く売れる。あまり小さい子では、売り物になるまで育てるのに手がかかる。しかし、ほどほどの大きさのものなら、白人のチャーリーが高い値で買ってくれるといっていた。彼は金がほしかった。近いうちに花嫁をむかえたいと思っていた。それには花嫁の身代金としてウシやヤギを、相手の親にわたさなくてはならない。そのウシやヤギを手に入れるには、高く売れる野生動物をつかまえるのが、いちばんてっとりばよい。

メニユエは足音をしのばせて、岩山へ近づきだした。なんの子で、どのくらいの高さの子か、なん匹いるのか、ということだけでもたしかめてみようと思った。あれだけ鳴いているということは、腹がへっているのだ。しかも、子どもが鳴くぐらい腹をすかしているということは、親が獲物をじゅうぶんにとれないでいるからだ。親はきつと、獲物を求めて遠くへでかけているにちがいない。

そのころ一頭のヒヨウが、一キロほどはなれた水べで水をのんでいた。そのヒヨウは、ここ数日、獲物^{えもの}がうまくとれないでいた。トムソンガゼルやグラントガゼルはけっこういるのだが、みんなひどくびくびくしていて、逃げ足^にがはやくなっていた。

しかし、きょうは、うまいぐあいに、水をのみにきたガゼルを木の上から襲^{おそ}って、何日ぶりかで、お腹^{なか}いっぱい肉をたべた。

水をのんでしまうと、ヒヨウは、たべのこしたガゼルの死骸^{しかい}のところへもどった。そして、残骸^{がいかい}をくわえあげると、十メートルほどはこんでいって、いっきに大きな木にかけのぼった。その身がるさは、ほんとうにおどろくばかりだった。自分の体の半分ぐらいもある獲物^{えもの}の残骸^{しかい}を、かるがると高い木の上へはこびあげた。

ヒヨウは木のまたに残骸^{しかい}をひっかけると、下へおりようとした。ひよいと巣穴^{すけ}のある岩山のほうを見たとき、岩場のあいだをのぼっていく人間のすがたをみとめた。

メニユエは、一步一步、そろそろと岩のあいだをのぼっていった。左手にもっている盾^{たて}がじやまだだったが、まんいちの場合を考えると、槍^{やり}と盾^{たて}をおいて岩山へのぼるわけにはいかなかった。

子ネコのような鳴き声は、ときどきとまったが、すぐにまた聞こえた。ときたま、ガツという声がまじるところをみると、子ども同士でけんかをしているようだ。

声はだんだん近づいてきた。彼はますます足音をしのばせ、地面にかがみこむようになかった。

で、そろそろと岩山をのぼった。

やがて、岩のわれめのなかから声が聞こえてくるところへついた。岩のわれめは小さくて、とてもなかへはいることはできない。どこかほかに大きな入り口があるのかもしれないが、そのあたりには見あたらなかった。

彼はまず、穴のなかへ槍のしりをさしこんでみた。すると、何匹もの子ネコが、いっぺんにさわぐような声がおこった。声のようすでは、かなり小さい子ようだ。彼は槍をわきにおき、穴のなかへ手をつっこんだ。

そのとき、とつぜん、ものすごいなり声がおこった。ふりあおいだ岩の上から、大きなヒヨウが、逆おとしに襲いかかってきた。

メニユエは盾で顔をおおうと同時に槍をつかんだ。だが、盾の上へとびおりたヒヨウは、すさまじい勢いであれば、メニユエは顔にひどい痛みが走るのを感じた。

ヒヨウはすぐにとびはなれ、岩の上へかけのぼった。そして、ふたたび戦士に襲いかかった。だが、メニユエは、こんどは槍をかまえていたので、ねらいをつけて槍を突きだした。

槍はヒヨウの腰に深く長い傷あとをつけたが、ヒヨウはすごい勢いで盾に体当たりをくわえた。メニユエは足をすべらせて、盾とヒヨウもろとも岩山を五メートルほどころげ落ちて、気を失ってしまった。

ヒヨウは男からとびはなれると、いつきに岩山をかけのぼった。そして巢穴にとびこむと、子どもたちが大きわぎですりよつてきた。子どもたちは腹をすかして、先をあらそつて、母親の腹の下へもぐりこんだ。

母親は肩で息をしながら、巢のなかで体のむきをかえ、入り口のほうへ顔をむけてしゃがみこんだ。敵があらわれたら、いつでもとびだせるように身がまえたまま、子どもたちに乳をあたえた。

乳の出はまだよくなかったが、子どもたちは、むさぼるように乳首をすった。子どもたちのなかには、乳の出かたをよくしようと、両方のまえ足で乳房をこねまわしているものもいた。

ヒヨウの母親は、体じゅうの神経を耳にあつめて、もえるような目つきで、ほら穴の入り口のほうをにらみつづけた。

ちようど日がしずむところで、岩山のほら穴からのぞむ平原のかなたに、まっ赤な太陽が草原を赤あかとそめていた。

メニユエはしばらくたおれていたが、やがて気がつくと、あわてておきあがり、盾をつかんだ。槍は遠くにころがっていた。顔がひきゆがみそうにいたんだ。左のほほに、ひどいかさ傷をうけていた。

彼はすばやく槍をひろうと、あたりを見まわし、岩山の上を見つめたまま、そろそろと山をく



だりはじめた。

ヒヨウは、その夜のうちに、巢穴^{すあな}のなかの子をはこびだした。子どもは、ぜんぶで三匹^{びき}だった。ヒヨウが新しくえらんだ巢穴^{すあな}は、三キロはなれたところにある岩場^{いば}だった。

最初^{さいしょ}の子をはこんだときは、べつに問題はなかった。だが二番目の子をはこぶときに、ゾウの群れとぶつかった。ゾウの群れは大声でさわぎだし、なかの一頭が、かなり遠くまで追いかけてきた。ヒヨウは子どものゾウを襲^{おそ}うことがあるので、追いかけてもしかたがなかった。

ヒヨウはやつと新しい巢穴^{すあな}へたどりつくと、二番目の子をおろして、すぐに外へとびだした。そして三キロの道のりを風のように走っていった。

ヒヨウがもとの岩山へ近づいたころ、ハイエナのさけびが聞こえた。暗い闇夜^{ぐみよ}にひびくハイエナの声は、ぞつとするようなうすき悪い声だった。ハイエナたちは獲物^{えもの}を見つけたらしい。

ヒヨウが巢穴^{すあな}へかけのぼっていくと、ハイエナたちがあざけるようなさけびをあげて、巢穴^{すあな}のまえから、とびちるように逃げ^にだした。そのうちの一匹^{びき}が、ヒヨウの子をくわえていた。

ヒヨウは電光のようにそのハイエナを追った。ハイエナは、とても逃げ^にきれないとわかると、ヒヨウの子をほうりだして逃げ^にげた。

ヒヨウは子どもをなめまわしたが、その子は、かなり傷^{きず}をうけていた。ヒヨウはその子をくわえあげると、岩山をおりはじめた。

だが、そのとき、ヒヨウは腰のあたりにはげしい痛みをおぼえた。いままでむちゅうで走りつづけていたが、これで最後の子だというときになって、少し気のゆるみがでたのかもしれない。た。

最初の一キロは、なんとかふつうに走れたが、やがて、左のあと足がすごく重くなった。ヒヨウはくわえていた子を地面におろして、腰のあたりをなめはじめた。マサイ族に槍で突かれたところが、ずきずきいたみ、血がかなり流れでて毛皮をぬらしていた。

しばらくしてヒヨウは、また子どもをくわえてすすみだしたが、もう走ることはできなかった。そして、さいごの一キロにかかったときには、かなりひどく足をひきずっていた。

マサイ族のメニューエは、顔の傷をなおすのに、何日もかかった。傷はあさかったが、傷口は長く左ほほを裂いていた。彼は小屋で寝て傷をなおしたが、ヒヨウのほうは寝ているわけにいかなかった。乳をほしがる子がいたし、自分で餌をとりにいかなければ、空腹をみたすことができなかったからだ。

槍で突かれた翌日、ヒヨウは足をひきずりながらでかけていって、木の上にひっかけておいたガゼルの死骸をたべた。それで二日ぐらいはなにもたべなくてもへいきだった。

ヒヨウは二匹の元気な子に乳をのませ、傷ついた子の傷をなめてやりながら、自分の腰の傷も

なめてすごした。子どもの傷はわき腹だったが、毎日やさしくなめてやるうちに、だんだんよくなり、乳もふつうにのむようになった。

四日目にヒヨウの母親は、どうにも腹がすいてやりきれなくなり、狩りにでかけた。しばらくいくと、ガゼルの群れが熱心になにかを見つめているすがたが見えた。

ヒヨウは、そろそろとガゼルにしのびよった。

ガゼルたちのむこうで、なにか茶色いものが二つ三つ、ころげまわっている。ライオンの子だった。

ヒヨウは草のなかにふせて、じつとようすを見た。ライオンの子どもたちは、組みあつてごろごろころげまわっていたかと思うと、ぱつととびおきて、追いかけあいをはじめた。しかし、すぐそれにもあきると、こんどは、草のなかにしゃがみこんで、ガゼルのほうへしのびよりはじめた。

ガゼルたちは、まるでライオンの子をかからかうように、おなじ場所でぴょんぴょん、とびはねだした。

そのとき、ライオンの母親がぶらぶらと歩いてきて、子ライオンのそばに、どさっと体をなげだした。

子どもたちは、たちまち母親の体によじのぼって遊びだした。一匹の子は、母ライオンの尾

ぽに組みついて、かじったりひつかいたりしはじめ、もう一匹は、母親の首にまたがって、耳をつかまえようとしていた。母親のライオンは、尾っぽをふり動かしたり、ときどき首をふって、ころげ落ちる子を両方のまえ足でおさえて、なめたりした。

ガゼルたちは安心したのか、とびあがるのをやめて、草をたべながら、ヒヨウがかくれているほうへ近づいてきた。

ヒヨウは体をびったり地面にふせていた。いちばん前のガゼルは、おどろくほど近くまで、どんどんやってきた。

ヒヨウはじゅうぶんねらいをつけてから、地面をけた。だが、腰がずきんといたみ、いつもならじゅうぶんにとびつける距離でありながら、相手につめをかけることもできずに、とり逃がしてしまった。

それだけではない。ガゼルのあとからかきだしてきたライオンの母親に、かなり追いかけられた。その母ライオンは右耳に大きな傷があった。子どもにかじられたわけではないだろうが、ヒヨウにはその耳が印象にのこった。というのは、母ライオンがおこって耳をうしろへ寝かせたとき、傷のあるほうの耳は立ったままだったからだ。おそらく耳に傷をうけたとき、耳を寝かせる筋肉がどうにかなったのだろう。

ヒヨウがかなり逃げたとき、うしろのほうで銃声がおこった。するとライオンは、ヒヨウを追い